

『遊心安楽道』テキスト考

辻本 俊郎

目次

- 一、はじめに
- 二、『遊心安楽道』テキストについて
- 三、『遊心安楽道』唯一の註釈書『遊心安楽道私記』
- 四、日本仏教章疏にみられる『遊心安楽道』
- 五、まとめ

キーワード：『遊心安楽道』来迎院本、『遊心安楽道』明暦本、『安養集』、『安養抄』、義海『遊心安楽道私記』

一、はじめに

新羅・元暁（西暦六一七～六八六年）の、数ある著作の中で、高麗僧・義天『義天録』（西暦一〇九〇年）や南都僧・永超『東域伝灯目録』（西暦一〇九四年）によると阿弥陀仏、あるいは弥勒浄土思想関係の著述は次の一四部である。すなわち、

- ①『般舟三昧経疏』一卷
- ②『般舟三昧経略記』一卷
- ③『般舟三昧経略疏』一卷
- ④『阿弥陀経疏』一卷
- ⑤『阿弥陀経通讀疏』二卷
- ⑥『無量寿経疏』一卷
- ⑦『無量寿経宗要』一卷

⑧『無量寿経私記』一卷

⑨『無量寿経料簡』

⑩『観経宗要』一卷

⑪『弥陀証性偈』一句

⑫『遊心安楽道』一卷

⑬『弥勒上生経疏』三卷

⑭『弥勒上生経宗要』一卷

である。この中で現存するのは、④『阿弥陀経疏』一卷、⑦『無量寿経宗要』一卷、⑪『弥陀証性偈』一句、及び本小論で取り扱おうとする⑫『遊心安楽道』一卷、そして、⑭『弥勒上生経宗要』一卷の五部のみである。

ところで、この中で『遊心安楽道』は現在の学界では元暁偽撰とされている。というのは、1914年5月に慶州にある内東面暗谷理で朝鮮総督府参事官室出張員の中里伊十郎によって「高仙寺誓幡和上塔碑」の下半分が発見されたことによるのである。そこには「以垂拱二年三月三十日終於穴寺。春秋七十也。即於寺之西峰権龕室。」とある¹。中国・垂拱二年というのは、新羅神文王六年（西暦六八六年）のことである。すなわち、西暦六八六年に元暁が七〇歳で入寂したことが記されているのである。この記事が正確なことは、『三国遺事』「元暁不羈」条に隋大業十三年（西暦六一七年）に元暁生年との記事が見られ²、「高仙寺誓幡和上塔碑」との整合

¹ 『朝鮮金石総覧』巻上、国書刊行会、1971。P.42。

² 「初母夢流星入懷。因而有娠。及将産。有五色雲覆地。

真平王三十九年。大業十三年丁丑歳也」（『大正蔵』vol.49 p.1006a）。館、1981年

性も採れることから証明されよう。

ところが、『遊心安楽道』には一二種の所引典籍が見られることはよく知られている。すなわち、

- ①伝唐僧鑑訳（仏陀跋陀羅・宝雲訳、西暦五世紀）『無量寿経』、
- ②重良耶舎訳（西暦四二四年～四五三年漢訳）『観無量寿経』、
- ③鳩摩羅什訳（西暦四〇二年漢訳）『阿弥陀経』、④仏駄跋陀羅訳（西暦四一八～四二〇年漢訳）『華嚴経』、
- ⑤菩提流志訳（西暦八世紀）訳『大宝積経』「発勝志楽会」、
- ⑥菩提流志訳『不空罽索神変真言経』、
- ⑦元暁（西暦六一七～六八六年）著『両卷無量寿経宗要』、
- ⑧迦才（西暦七世紀）著『浄土論』、
- ⑨懷感著（西暦六八一～七〇一年）『釈浄土群疑論』、
- ⑩智儼（西暦六〇二～六六八年）著『華嚴経内章門等雜孔目章』、
- ⑪窺基（西暦六三二～六八二年）著『観弥勒上生兜率天経賛』、
- ⑫世親（西暦四〇〇～四八〇年）著・菩提流支訳（西暦五三一年、あるいは西暦五二九年漢訳）『無量寿経論』

である。「高仙寺誓幡和上塔碑」の発見によっ

て元暁の没年が西暦六八六年で確定したということ、唐・神竜二年（西暦七〇六年）～先天二年（西暦七一三年）に菩提流志が漢訳した『大宝積経』「発勝志楽会」、さらに神竜三年（西暦七〇七年）に同じく菩提流志が漢訳した『不空罽索神変真言経』が引用されている矛盾点が明らかとなり、したがって、『遊心安楽道』は、元暁偽撰説が定説となっているのである。

この「高仙寺誓幡和上塔碑」の発見以降、『遊心安楽道』の撰述者について、日本や韓国の先学者たちがあれこれと検討した結果、新羅僧撰述説や日本撰述説など学界に提出され、未だにその決着を見ていないのが実情である³。

二、『遊心安楽道』テキストについて

『遊心安楽道』テキストは、善本と呼べるものがなく、残念ながら現在でも厳密なテキスト研究が行われていない⁴。江戸時代中期の浄国寺・義海（西暦？～一七五五年）は、『遊心安楽道』に対する、現存する唯一の註釈書である『遊心安楽道私記』（西暦一七四九年、寛延二年）序に次のように記している⁵。

唯其書、文字訛脱甚多、殆乎不可通曉。而未獲善本、閱宗要、以稍善於此。乃就而校之。或推其義而正之。

（ただこの書物（『遊心安楽道』）は、誤字や脱

³ 主だった諸氏の説を示すとおよそ次の通りになろう。
村地哲明（元暁偽撰説）
落合俊典（西暦一〇世紀中葉、日本叡山僧撰述説）
章輝玉（西暦八世紀初め、中国・弘法寺系新羅僧撰述説）
韓普光（西暦八世紀中葉、新羅・新羅僧撰述説）
愛宕邦康（西暦八世紀、日本・東大寺華嚴層智憬撰述説）
この中で、具体的な撰述名を挙げているのは愛宕邦康のみである。この意味では愛宕説は、注目に値すべき論考であると言えよう。このような状況の中で筆者は、現在のところ日本撰述説の立場を採っている。し

たがって、本来ならば、『遊心安楽道』は、韓国語読みとして“Yusim Allakuto”とすべきであるが、小論の欧文タイトルでは、“Yuushin Anrakudou”と日本語読みとした。

⁴ 落合俊典は、「遊心安楽道諸本攷」華頂短期大学『研究紀要』第33号、pp.20-41, 1988.の中で「従来より本書に限って厳密な文献学的研究が行われていないことに強い危懼を抱いていた。およそどの論文も、大正蔵本と浄全本の底本となった江戸期刊本に遡って考証したものはなく」と嘆いている。

⁵ 『純浄土宗全書』vol.7 p.215。

字がとても多く、ほとんど読み通すことが出来ない。かつ、『遊心安樂道』の善本を手に入れることが出来なかった。〔そこで元暁の著作であり、『遊心安樂道』の中に多くの文が引用されている〕『無量寿経宗要』を参照して、これ（『遊心安樂道』）を校正しながら、その文の意味するところを推定しなければならなかった。）

とある。義海は、西暦一七四九年より数年後の、明暦四年（西暦一六五八年）に刊行された、いわゆる「明暦本」の祖本を参照していたと推定されている。

しかしながら、『遊心安樂道』テキスト研究に限って言うならば、この義海の、元暁『無量寿経宗要』を参考にして『遊心安樂道』を校正するという研究方法に賛同することはとうてい出来ないのである。というのは、『遊心安樂道』の著者は前述したように十二種の典籍を引用しながら、自説を展開するために時には字句の加減や変更なども積極的に行っているのである。したがって、明暦本と元暁『無量寿経宗要』とを対比して校正したとしても『遊心安樂道』そのものの論旨の変更という新たな問題も引き起こし、かえって『遊心安樂道』テキスト研究に対して混乱を招くという結果になってしまっておそれがあるのである。

また、道忠（西暦？～一二八一年）『釈浄土群疑論探要記』、道光（西暦一二四三～一三三〇年）『新扶選択報恩集』、聖問（西暦一三四一～一四二〇年）『決疑鈔直牒』について愛宕邦康は次のように述べる。

「『遊心安樂道』と『両卷無量寿経宗要』の両著に存在する同文を引用する場合、なぜか主著とされていた『遊心安樂道』からの引用を徹底的に回避している事例が存在するのである。おそらく『遊心安樂道』はきわめて早い時期から

通読の不可能な状態にあったため極力その引用が敬遠されたのではなかろうか⁶。」

とし、『遊心安樂道』が持つテキスト上の問題点を挙げている。

ところで、現在の学界においては、『遊心安樂道』を研究する際、主にテキストとして依用されているのが、『大正新脩大蔵経』（以下、『大正蔵』とする）、あるいは、『浄土宗全書』（以下、『浄全』とする。西暦一九九八年刊）所収のそれである。ともに「明暦本」を底本としているのであるが、試みに両者を対照させると、底本が同じにもかかわらず、次のように字句の異同が多数見られたのである。

①（大）言述教起宗致者**然**夫衆生（『大正蔵』vol.47 p.110b）。

→（浄）言述教起宗致者**惟**夫衆生（『浄全』vol.6 p.606a）。

②（大）不可具陳（『大正蔵』vol.47 p.110b）。

→（浄）不可具陳**矣**（『浄全』vol.6 p.606a）。

③（大）於西方安樂世界**爲**一日一夜（『大正蔵』vol.47p.111a）。

→（浄）於西方安樂世界**若**一日一夜（『浄全』vol.6 p.607b）。

④（大）末那四**牛**時現行故（『大正蔵』vol.47 p.111b）。

→（浄）末那四後時現行故（『浄全』vol.6 p.608a）。

⑤（大）又言設我得佛國中聲聞（『大正蔵』vol.47 p.111c～112a）。

→（浄）又言設我得佛**至**國中聲聞（『浄全』vol.6 p.609a）。

⑥（大）此諸衆生**生**彼宮殿五百歳中（『大正蔵』vol.47 p.112a）。

→（浄）此諸衆生彼宮殿五百歳中（『浄全』vol.6 p.609b）。

⁶ 愛宕邦康, p94。

⑦ (大) 是顯四疑所**迷**境也 (『大正藏』 vol.47 p.112b)。

→ (淨) 是顯四疑所**述**境也 (『淨全』 vol.6 p.610a)。

⑧ (大) 不得以自淺識**思識** (『大正藏』 vol.47 p.112b)。

→ (淨) 不得以自淺識**思議** (『淨全』 vol.6 p.610b)。

⑨ (大) 而能自謙心**眼**未開仰推如來 (『大正藏』 vol.47 p.113b)。

→ (淨) 而能自謙心**明**未開仰推如來 (『淨全』 vol.6 p.612b)。

⑩ (大) 爾時慈氏菩薩白言世尊 (『大正藏』 vol.47 p.113c)。

→ (淨) 爾時慈氏菩薩白**佛**言世尊 (『淨全』 vol.6 p.613a)。

⑪ (大) 不了**佛**佛智不思議智不可稱智大乘廣智**智**無等無倫最上勝智 (『大正藏』 vol.47 p.113c)。

→ (淨) 不了佛智不思議智不可稱智大乘廣智無等無倫最上勝智 (『淨全』 vol.6 p.613a)。

⑫ (大) 自然化生跏趺而坐須臾之**須** (『大正藏』 vol.47 p.113c)。

→ (淨) 自然化生跏趺而坐須臾之**頃** (『淨全』 vol.6 p.613a)。

⑬ (大) 譬如轉輪聖王有七寶牢獄 (『大正藏』 vol.47 p.113c)。

→ (淨) 譬如轉輪聖王**別**有七寶牢獄 (『淨全』 vol.6 p.613b)。

⑭ (大) 繫以金鎖供**養**飲食衣服 (『大正藏』 vol.47 p.113c)。

→ (淨) 繫以金鎖供**給**飲食衣服 (『淨全』 vol.6 p.613b)。

⑮ (大) 無所遺無不苞故 (『大正藏』 vol.47 p.114b)。

→ (淨) 無所遺無不**包**故 (『淨全』 vol.6 p.614b)。

⑯ (大) 非有非無離言**絕**慮 (『大正藏』 vol.47 p.114b)。

→ (淨) 非有非無離言慮 (『淨全』 vol.6

p.614b)。

⑰ (大) 隱密義者**此**望第三對純淨土果 (『大正藏』 vol.47 p.114c)。

→ (淨) 隱密義者**七**望第三對純淨土果 (『淨全』 vol.6 p.615a)。

⑱ (大) 若念佛相**無**間念佛乃至十念 (『大正藏』 vol.47 p.115a)。

→ (淨) 若念佛相間念佛乃至十念 (『淨全』 vol.6 p.616a)。

⑲ (大) **廣**說如彼往生因緣略說如是 (『大正藏』 vol.47 p.115c)。

→ (淨) **應**說如彼往生因緣略說如是 (『淨全』 vol.6 p.617a)。

⑳ (大) 持七寶蓮**華**至行者前 (『大正藏』 vol.47 p.116c)。

→ (淨) 持七寶蓮至行者前 (『淨全』 vol.6 p.619b)。

㉑ (大) 化佛光明遍滿其**室** (『大正藏』 vol.47 p.116c)。

→ (淨) 化佛光明遍滿其**臺** (『淨全』 vol.6 p.620a)。

㉒ (大) 地獄**猛**火化為清涼風 (『大正藏』 vol.47 p.117a)。

→ (淨) 地獄火化為清涼風 (『淨全』 vol.6 p.620a)。

㉓ (大) **住**歡喜地者謂彼小劫當此僧祇 (『大正藏』 vol.47 p.117b)。

→ (淨) **位**歡喜地者謂彼小劫當此僧祇 (『淨全』 vol.6 p.621a)。

㉔ (大) 念無量壽佛**願**生其國 (『大正藏』 vol.47 p.117c)。

→ (淨) 念無量壽佛**欲**生其國 (『淨全』 vol.6 p.622a)。

㉕ (大) 悟**罪**漢果 (『大正藏』 vol.47 p.119a)。

→ (淨) 悟**羅**漢果 (『淨全』 vol.6 p.624b)。

㉖ (大) 是法王所居蓮**華**藏 (『大正藏』 vol.47 p.119b)。

→ (淨) 是法王所居蓮**臺**藏 (『淨全』 vol.6

p.625c) o

㊦ (大) 無雜**不行**不信 (『大正藏』 vol.47 p.119c)。
→ (淨) 無雜**不可**不信 (『淨全』 vol.6 p.626a)。
以上のように『大正藏』、『淨全』 両者とも同じ「明曆本」を底本としながらも字句の異同は決して少ないとは言えない。つまり、『遊心安樂道』研究については『大正藏』のみによって、あるいは、『淨全』のみによって研究を進めることは甚だ危険であると言わねばならない。

また、『大正蔵』は、対校本として大谷大学所蔵金陵刻本を使用しているが、ここに挙げた二七文中の七文、すなわち③、⑪、⑫、⑫、⑫、⑫、⑫の字句が『浄全』テキストを支持しているのである。ということは、『浄全』所収の『遊心安楽道』は、果たしてその底本が「明暦本」であったのであろうかという疑問も当然のことながら生じてくる。

さらにこれらを「明暦本」⁷と比してみると、①、④、⑧、⑩、⑪、⑫、⑬、⑭、⑮、⑲が『大正蔵』の字句の異同と一致し、②、③、⑤、⑥、⑦、⑨、⑬、⑭、⑮、⑯、⑰、⑱、⑳、㉑、㉒、㉓、㉔、㉕、㉖、㉗が『浄全』のそれと一致していることが判明したのである。なるほどこれらのテキストは「明暦本」の系統ではあるけれども、その実態とは言えば、細かく調査をすれば異なる系統のテキストであると言えるかもしれない。

そのような状況の中で西暦一九七二年になって『遊心安楽道』について注目すべき報告がなされた。すなわち、文化庁文化財保護部美術工芸課編『来迎院如来蔵聖教文書類目録』に京都・大原にある来迎院『遊心安楽道』の書誌情報が報告されたのである。それによると、

・『遊心安楽道』 良忍手沢本

縦二六・〇 第二紙長五〇・五、三十一紙
卷子装、表紙茶地楮紙、料紙黄楮紙、墨界

「外題」遊心安樂道

「尾題」遊心安樂道、一卷

「本文」一行十五～十八字、一紙二十七行、
無点、校合加筆

「奥書」一校了

「印記」各紙紙背繼目右下二黑方印「雄」各一顆

「時代」平安後期

○包紙表書「遊心安樂道新羅国元曉撰 良
忍上人之本」

とある。この報告に対して愛宕は、本文に関して二十五行（第一紙、第二十紙、第二十二紙、第二十三紙、第二十四紙、第二十七紙、第三十紙）、二十八行（第四紙、第五紙）、十三字（第十紙十七行）、二十字（第十四紙四行、第十六紙十三行、第二十紙二行）と補足している（愛宕、p.109）

さらに、西暦一九八一年には横田兼章「大原如来蔵における良忍上人関係資料」（融通念仏宗教学研究編『良忍上人の研究』）という論文の中で「来迎院本」『遊心安楽道』古写本が紹介されたのである⁸。しかも、そこには幸いなことに「来迎院本」『遊心安楽道』の巻首と巻尾だけであるが、その写真が掲載されているのである。現在のところ残念なことに「来迎院本」は公開されていないのであるが、巻首と巻尾のみ「明暦本」との対照が可能となったのである。

ここでその写真版を参考にして翻刻してみると次のようになる⁹。翻刻中の□は、写真が不

⁷ ここでいう『遊心安楽道』『明暦本』は、国文学研究資料館所蔵のテキスト（請求番号ワ3/137）が、ホームページ上で公開されているのでそれを使用した。

⁸「黄麻紙の罫引きに楷書をもって書写されている。表

には「良忍之本」となるが奥書がなく、筆者も明らかでない」と報告されている（横田兼章「大原如來藏における良忍上人関係資料」『良忍上人の研究』百華苑、p.33, 1981.）。

鮮明で、判読不能の文字を表している。

(巻首)

遊心安樂道

遊心安樂畧開七門初述教起宗致二定彼
土所在三明疑惑患難四顯往生因緣五出
往生品數六論往生難易七作**旋**復除疑
言術教起宗致者然夫衆生心性融通無礙
泰若虛空湛猶巨海若虛空故其體平等无
別相而可得何有淨穢之處猶巨海故其性
□□□□□□不逆豈無動靜之時余乃或
□□風淪五濁而久轉**汎**苦浪而長流或□
□□□四流而不還至彼岸而永寂若斯**寂動**

(巻尾)

□□□□□□造若果影追痛哉獨**困**獨厄
无人救護自非同躰大悲弘濟秘術誰能遠
開幽鍵**扶**昇花臺雖无他作自受之理而有
緣起難思之力則知以遇咒沙即**成**有緣若不
被沙何論脫期惟夫大悲无方長舌无難不可
不信後悔无**及**然則不信用者徒負厚恩報日
□□有順行者接□花蓮孝順便立幸逢
真言令出不離□**有**君子誰不奉行散沙墓
□□□□□□□呪衣着身聆音誦字者

となる。ここで問題となるのが、太字で記した文字である。これについても便宜的に「明暦本」を底本としている大正蔵を対照させると

「旋」→「疑」、「余」→「爾」、「汎」→「況」、「寂動」→「動寂」、「困」→「因」、「扶」→「扶」の文字が欠落)、「成」→「成」の文字が欠落)、「及」→「反」、「離」→「難」、「有」→「百」となっている。わずか巻首、巻尾合わせて十九行に過ぎないのに字句の異同は決して少ないとは言えない。ということは、前述したようにここでも『大正蔵』のみによって研究をすすめることは頗る危険なのである。

また、そのような状況にあって近年になって韓普光が、『遊心安樂道』テキストの「明暦本」を底本として「来迎院本」とを対照させて、さらに『遊心安樂道』に引用されている経論の文をも対照させ、しかも、詳細な註を施した「諸本対照校訂遊心安樂道」を公にしているのである(韓普光, pp.591-747)。

しかしながら、韓の「諸本対照校訂遊心安樂道」の来迎院本の翻刻と横田論文の中に掲載されている写真版とを詳細に対照させてみると、少なからず誤りも見出せるのである。一例を記すと、韓は「独**困**独厄」と翻刻しているが¹⁰、写真版では「独**困**独厄」となっている。しかも、韓は「困」を「因」と間違えてしまったためにこの個所に註を施して「『校訂明暦四年本』には「困」と校訂しており、また、『安養集』巻十にも「困」と記している。なお内容上で「困」が正しいと思われる。」¹¹としている¹²。したがって、当然のことながら我々は同様な誤

⁹ 落合俊典は、巻尾を来迎本、明暦本、続蔵本、金陵刻本を対照させ、さらに明恵『光明真言土砂勸信記』に引用されている『遊心安樂道』の文をも対照させ、詳細な検討を加えている。その上で、来迎院本が明暦本や金陵刻本の誤りを訂正できる良質の写本であることを論証している(「遊心安樂道諸本攷」華頂短期大学『研究紀要』第33号、pp.20-41, 1988.)。

¹⁰ 韓普光, p.747。

¹¹ 韓普光, p.747。

¹² 韓は(来迎院本を)「制約されながら対照する作業を行なったもので、おそらく不備なところが残ってお

り、誤ちもあることと思われるので、将来的には(中略)マイクロフィルムでも入手できれば」云々と告白している。韓の調査後、愛宕邦康も来迎院本を実見していくつかの論考を発表しているが残念ながら字句の異同などに関する報告はない。しかし、来迎院本の本文に関して、二十五行(第一紙、第二十紙、第二十二紙、第二十三紙、第二十四紙、第二十七紙、第三十紙)、二十八行(第四紙、第五紙)、十三字(第十紙十七行)、二十字(第十四紙四行、第十六紙十三行、第二十紙二行)と詳細な書誌情報を報告している(愛宕, p.109)。

りが他にもあると考えて韓の「諸本対照校訂遊心安楽道」を使用すべきであると考ええる。しかし、そのような多少の誤りはあるとはいえ、現在においては来迎院本『遊心安楽道』の全体にわたる唯一の翻刻、及びテキスト研究であり、そういう意味では大変貴重であるといえる¹³。

しかし、その後実際に「来迎院本」を調査した愛宕は、「比較的善本である」（愛宕, p.111）と評価しつつも「一校了」と校閲を行なったことが明示」されながらも、なおかつ多数の誤字脱字などが確認され、『遊心安楽道』は、その出現当初より善本というには程遠い状態にあった」（愛宕, p.111）と結論づけている。

また、韓は来迎院本の『遊心安楽道』テキストに関して次のような見解を記している。

「来迎院本」の『遊心安楽道』が康和年間（1099～1105）の手沢本であるならば、（中略）源隆国（1004～1066）の『安養集』に引用されている『遊心安楽道』とはあまり、年代的な差がないし、また、長西（1184～？）の『長西録』とも年代的な差があまりないので、十一世紀のころ、日本で『遊心安楽道』が愛読されている時に「来迎院本」が流通されたと推定することができる。したがって、源隆国が引用した『遊心安楽道』を筆写して愛読し、明恵はこれによって『光明真言土砂勤信記』を著述したと推定できる。また、覚明房長西は『長西目録』にこれを記録し、法然も『選択集』にこれを引用したと考えられる。とある¹⁴。

さらに韓は、次のようにも推定する。「珍海

が参考にしていた『遊心安楽道』は良忍の手沢本と同じものであったと推定できる」としている¹⁵。つまり、韓は源隆国、珍海が引用していたのは『遊心安楽道』「来迎院本」系のテキストであったと断定ではなく、あくまでも「推定できる」とし、残念ながら消極的な姿勢を見ているのである。本小論では、源隆国『安養集』だけでなく、『遊心安楽道』を引用した諸師がどの『遊心安楽道』テキストを見ていたのか、という点について資料を彼此対照させて「推定」ではなく、明確な結論を出したい。

三、『遊心安楽道』唯一の註釈書『遊心安楽道私記』

前述した義海の著作『遊心安楽道私記』は、伝元暁『遊心安楽道』の唯一の註釈書であることはよく知られている。この書を著す際に義海が見た『遊心安楽道』テキストは「来迎院本」ではなく、「明暦本」系のテキストであると言われてきた。すなわち、落合俊典は、『遊心安楽道私記』（宝暦二年刊一七五二）を著した義海（一一七五五）は、その中でたとえば、「現本門作同非」（『浄全』続七、二五二頁）という割注の形で（中略）言及している。そのことから義海の依った現本とは明暦四年刊本であることが知られる。¹⁶とする。しかし、筆者は落合のいう、義海の依った現本とは明暦四年刊本であるという説に対して賛同できない。その根拠となるところが明確ではないからである。また、韓は、『大正新脩大藏經』および『浄土宗全書』の底本となった明暦四年（一六五八）刊、比丘大可校、西村九良右衛門版があるので

¹³ 現在のところ、『遊心安楽道』来迎院本についての体系的にまとまった研究を公にしているのは韓普光（韓普光『新羅浄土思想研究付・校訂『遊心安楽道』』東方出版、1991）と愛宕邦康（愛宕邦康『遊心安楽道』

と日本仏教』法蔵館、2006）の二人だけである。

¹⁴ 韓普光, pp.233-234。

¹⁵ 韓普光, p.296。

¹⁶ 落合俊典p.26, 1988.

あるが（以下、「明暦本」と略称する）、この「明暦本」が刊行年度も義海の『私記』著述より十一年先のことであり、また、義海が慨嘆しているように誤字、倒錯などが多くあるので、おそらく義海が底本として参考にした『遊心安楽道』は、「明暦本」であろう¹⁷としている。韓は、義海の著作年と「明暦本」の発行年が近いということから「明暦本」であろうと推測の域に留まっている。韓の説に対しても筆者は賛同することはできない。なぜならば、発行年が近いからという理由で、その本を見たという根拠には到底なりえないからである。

では、はたして実際はどうであったのか、という視点でここでは検討を加えたい。したがって、『遊心安楽道私記』に引用される『遊心安楽道』本文と「来迎院本」や「明暦本」などと対照していく。「明暦本」及び「来迎院本」の頁数は、韓普光『新羅浄土思想研究』東方出版、1991.の中に収められている「校訂『遊心安楽道』」の頁数（以下、韓とする）である。

（ア）果徳之長聲。（『浄全』続vol.7 p.219a）。

（明）（来）果徳之長遠。（韓, p.596）。前述

したように義海はこの書を著す際に、『遊心安楽道』テキストの善本が手に入らないことから、元暁『無量寿経宗要』を参照しているのである。この文は、『無量寿経宗要』からの引用であるが、そこでは、果徳之長遠。（『大正蔵』vol.37 p.125c）となっている。「明暦本」「来迎院本」及び『無量寿経宗要』も「聲」ではなく、「遠」を支持しているのである。したがって、「果徳之長聲」はどのテキストを支持しているのかという疑問が生じてくる。つまり、「明暦本」「来迎院本」のどちらでもないということである。言い換えると、義海の見た『遊心安楽道』

テキストは、「明暦本」「来迎院本」以外のそれであることは明白である。

（イ）可厭之皓皴現本皓字作時非也。（『浄全』続vol.7 p.219b）とあり、「現本「皓」の字、「時」に作る。誤りなり」とある。「明暦本」では「可厭之**時**皴」、「来迎院本」では「可厭之**皓**皴」とある（韓, p.596）。これに対して『無量寿経宗要』では「可厭之**皓**皴」（『大正蔵』vol.37 p.125c）とある。つまり、ここでは「皓」と「時」の異同である。つまり、「明暦本」ではなく、「来迎院本」及び『無量寿経宗要』を支持しているのである。したがって、義海がいう「現本」とは「来迎院本」のことであろうか。あるいは『無量寿経宗要』のことであろうか、という疑問が浮かびあがってくる。先ほどの（ア）からすると、「明暦本」「来迎院本」ではないことは明らかである。ということは我々は「明暦本」、あるいは「来迎院本」以外のテキストを想定しなければならないということになる。以下、この点を意識しながら検討してみよう。

（ウ）出觀現本觀字作現非也。（『浄全』続vol.7 p.223a）とあるが、「明暦本」「来迎院本」（韓p.609）、さらに『無量寿経宗要』（『大正蔵』vol.37 p.125c）ともに「出**現**」とある。やはりここでも「明暦本」「来迎院本」を支持していないのである。果たして義海はどのテキストを見たのであろうか。『大正蔵』では、対校本として大谷大学蔵金陵刻本を使用しているのであるが、そこには「出**觀**」とある。したがって、ここで初めて義海が見た『遊心安楽道』が「金陵刻本」の系統ではないかとの推測が成り立つ。

（エ）爲欲普現本普字作不非也。（『浄全』続

¹⁷ 韓普光, p.227。

vol.7 p.226a)。これに対して「明暦本は「爲欲不」、「来迎院本」では「爲欲普」（韓, p.620）とあり、ここでは「明暦本」ではなく「来迎院本」を支持しているのであるが、さらに言えば、金陵刻本も「普」であり、「金陵刻本」も支持しているのである。

（オ）謂疑現本疑作以非。（『浄全』 続vol.7 p.229b）。「明暦本」では「謂以」「来迎院本」では「謂疑」（韓, p.630）。『無量寿経宗要』（『大正蔵』 vol.37 p.130c）、金陵刻本「謂疑」となっている。ここでも（エ）同様に「明暦本」ではなく「来迎院本」、「金陵刻本」を支持しているのである。

以上、五つの字句の異同を見てきたが、義海のいう、「現本」というのは、「金陵刻本」系テキストであることは明白である。したがって、義海が底本として参照していた『遊心安楽道』テキストというのとは、「明暦本」であるという落合、韓の両名が指摘していたが、それは誤りであったことがここで明らかになったのである。

四、日本仏教章疏にみられる『遊心安楽道』

『遊心安楽道』の流伝を探る意味で、『遊心安楽道』を引用している書物を見てみよう。すなわち、

- ①宇治・源隆国（西暦一〇〇四～一〇七七年）『安養集』（西暦一〇七一年撰述）
- ②編者不明『安養抄』（西暦一一～一二世紀成立）
- ③編者不明『浄土厳飾抄』（西暦一一～一二世紀成立）
- ④禅林寺・永観（西暦一〇三三～一一一一年）『往生拾因』（西暦一一〇三年撰述）
- ⑤東大寺・珍海（西暦一〇九二～一一五二）『決定往生集』（西暦一一三九年撰述）
- ⑥法然（西暦一一三三～一二二二年）『選択本願念仏集』（西暦一一九八年撰述）

- ⑦法然撰・道光編（西暦一二四三～一三三〇年）輯『黒谷上人語燈録』（西暦一二七四年編纂）
- ⑧法然著・親鸞編（西暦一一七三～一二六二年）『西方指南抄』（西暦一二五六～一二五七年編纂）
- ⑨高山寺・明恵房高弁（西暦一一七三～一二三二年）『於一向専修宗選択集中催邪輪』（西暦一二一三年成立）、『光明真言加持土沙義』（西暦一二二七年撰述）、『光明真言土砂勸信記』
- ⑩良忠（西暦一一九九～一二八七年）『選択伝弘決疑鈔』（西暦一二五四年撰述）
- ⑪東大寺・凝然（西暦一二四〇～一三二一年）『華嚴孔目章發悟記』（西暦一二八六～一二八七年撰述）
- ⑫道光（西暦一二四三～一三三〇年）『無量寿経鈔』（西暦一二九六年撰述）
- ⑬湛睿（西暦一二七一～一三四七年）『起信論義記教理抄』（西暦一三二二年撰述）
- ⑭西大寺・定泉（西暦一二七三～一三一二年）『梵網經古迹補忘抄』（撰述年代不明）
- ⑮顕慧（～西暦一六九六年～）『起信論義記幻虎録弁偽』（撰述年代不明）
- ⑯鳳潭（西暦一六五四～一七三八年）『起信論義記幻虎録』（西暦一七〇一年撰述）
- ⑰義海（～西暦一七五二年～）『遊心安楽道私記』（西暦一七五二年撰述）

この中で、『遊心安楽道』テキストの流伝を探る手掛かり、すなわち、「明暦本」あるいは「来迎院本」かを判断する字句の異同を有しているテキストは、比較的古い時代、すなわち鎌倉時代末まで限定すると①源隆国『安養集』、②編者不明『安養抄』、③編者不明『浄土厳飾抄』、④永観『往生拾因』、⑤珍海『決定往生集』、⑨高弁『於一向専修宗選択集中催邪輪』、『光明真言加持土沙義』、『光明真言土砂勸信記』

記』、⑪凝然『華嚴孔目章發悟記』、⑬湛睿『起信論義記教理抄』、⑭定泉『梵網經古迹補忘抄』である。

まずは、『遊心安樂道』『明曆本』と「来迎院本」と『安養集』に引用された『遊心安樂道』本文を比べてみよう。『安養集』よりも以前に『遊心安樂道』が引用された例は、皆無であり、すなわち、その形跡は『安養集』によって初めてその引用文が確認できるのである。その意味においても『安養集』は重要な典籍であると言える。

小論で、『遊心安樂道』の底本とするのは「明曆本」「来迎院本」とともに韓の校訂本を使用し、前述したように誤りも含まれていることも考えられるので、『大正蔵』や『浄全』をも参考にするようにした。ただし、「明曆本」及び「来迎院本」のページ数は、韓「校訂本」のページ数である。『安養集』の頁数は西村岡紹・梯信暁『宇治大納言源隆国編安養集 本文と研究』百華苑、1993（以下、梯「翻刻」とする）のページ数である。

(ア)「明」復次衆生初学是法。「来」度次衆生初学是法。(韓, p.597)

→「安」復次衆生初学是法。(梯, p.440)。

「復」と「度」の異同である。

(イ)「明」十解以去種姓決定復無悲退亦非正為。「来」十解以去種性決定復無恐退亦悲正為。(韓, p.600)

→「安」十解以去種性決定復無恐退亦悲正為。(梯, p.441)。「姓」と「性」の異同。旁も読みも同じことから生じた異同であろう。「悲」と「恐」も部首（こころ）が同じであるために生じた異同である。

(ウ)「明」一味樂等。「来」一味平等。(韓,

p.606)¹⁸

→「安」一味平等。(梯, p.302)

(エ)「明」謂一向樂一向淨一向無災一向自在。

「来」謂一向樂一向淨一向無出失一向自在。

(韓, p.609)

→「安」謂一向樂淨一向淨一向無失一向自在。(梯, p.302)

(オ)「明」或時生起報無記心未那四牛時現行。

「来」或時生起報無記心未那四或丁時現行。

(韓, p.610)

→「安」或時生起報無記心未那四或丁時現行。(梯, p.302)

(カ)「明」非一向。「来」非一向無失。八地以上則不如是。依此義故揚大乘論云。(韓,

p.610)

→「安」非一向無失。八地以上則不如是。依此義故撰大乘論云。(梯, p.302)。ここの異同は「明曆本」の書写者が視線乖離などによって「無失。八地以上則不如是。依此義故揚大乘論云」を写し飛ばしてしまっただめと思われる。

(キ)「明」乘善名出世。「来」二乘善名出世。

(韓, p.610)

→「安」二乘善名出世。(梯, p.302)

(ク)「明」從出善功德生起此淨土故。「来」從出出世善功能生起此淨土故。(韓, p.610)

→「安」從出出世善功能生起此淨土故。

(梯, p.302)

(ケ)「明」非正定相三聚衆生苦生之地是然穢土。「来」三聚衆生共生之地是為穢土。(韓,

p.613) →「安」三聚衆生共生之地是為穢土。

(梯, p.303)

(コ)「明」不由業力墮於惡人。「来」不由業力墮於惡趣。(韓, p.616)

¹⁸ 韓普光は、「明曆本」を底本とする『大正蔵』が、「一味樂等」となっているのを単なる誤りであろうとみている(韓, p.607)。しかしながら、『浄全』も「一味樂

等」となっているので、決して『大正蔵』の誤りではない。

- 「安」不由業力墮於惡趣。(梯, p.303)
- (サ)「明」非生彼者自力所並不如穢土外器世界。「来」非生彼者自力所并不如穢土外器世界。(韓, p.621) →「安」非生後彼者自力所并不如穢土外器世界。(梯, p.304)
- (シ)「明」但求如来本願力故。「来」但承如来本願力故。(韓, p.649)
- 「安」但承如来本願力故。(梯, p.187)。
「求」と「承」の異同。これはともに異体字がよく似ているために生じた異同ではないか。
- (ス)「明」(相応文なし)「来」二者專念彼三者多少修善此觀及行為助業。(韓, p.651)
- 「安」二者專念彼仏三者多少撰善此觀及行是為助業。(梯, p.188)
- (セ)「明」及与二乗菩提菩薩一向志願三身菩提名無上菩提之心。「来」及与二乗菩提涅槃一向志願三身菩提名無上菩提之心。(韓, p.654)
- 「安」及与二乗菩提涅槃一向志願三身菩提名無上菩提之心。(梯, p.78)。ここでは「菩薩」と「涅槃」の異同である。
- (ソ)「明」欲心悉断之。「来」欲悉断之。(韓, p.654)
- 「安」願悉断之。(梯, p.78)
- (タ)「明」広長量齊等無所遣。「来」広長量齊等無所遣。(韓, p.655)
- 「安」広長量智等無所貴。(梯, p.78)
- (チ)「明」離言虛依此信解。「来」離言絶虛依此信解。(韓, p.655)
- 「安」離言絶虛依此住解。(梯, p.78)
- (ツ)「明」謂顯了義及隱密義隱密義者。「来」謂顯了義及隱密義者。(韓, p.658)
- 「安」謂顯了義及隱密義隱密義者。(梯, p.92)
- (テ)「明」(相応文なし)「来」如是至心令声不絶具足十念称南無仏称仏名。(韓, p.662)
- 「安」如是至心令声不絶具足十念称南無仏称仏名。(梯, p.93)
- (ト)「明」常得往生阿弥陀仏極樂世界。「来」当得往生阿弥陀仏極樂世界。(韓, p.667)
- 「安」当得往生阿弥陀仏極樂世界。(梯, p.94)。「常」と「當」との異同。前者は部首が「巾」。後者のそれは「田」である。部首は異なるが、字体が似ているので生じた異同である。
- (ナ)「明」豈不覺彼耶。「来」豈不是破耶。(韓, p.722)
- 「安」豈不是彼耶。(梯, p.507)
- (ニ)「明」是智度論之所判也。「来」是智度論之所明也。(韓, p.730)
- 「安」是智度論之所明也。(梯, p.466)
- (ヌ)「明」以是真言加持土沙一百遍。「来」以是真言加持土沙一百八遍。(韓, p.743)
- 「安」以是真言加持土沙一百八遍。(梯, p.484)
- (ネ)「明」不行不信後悔無反。「来」不可不信後悔無及。(韓, p.744)
- 「安」不可不信後悔無及。(梯, p.485)
- (ノ)「明」今出不難凡百君子。「来」今土不難取有君子。(韓, p.745)
- 「安」合土不難取百君子。(梯, p.485)
- この中で、「明暦本」を支持するのは(ア)と(ツ)のみである。「明暦本」あるいは「来迎院本」の両者とも支持しないのは(イ)(ソ)(タ)(チ)(ナ)(ノ)の五文あるが、明らかに「来迎院本」を支持しているのは、(ウ)(エ)(オ)(カ)(キ)(ク)(ケ)(コ)(サ)(シ)(ス)(セ)(テ)(ト)(ニ)(ヌ)(ネ)と実に一七文にも及ぶ。すなわち、『安養集』の編者・源隆国は、「来迎院本」系の『遊心安楽道』テキストを座右に置いていたことが明白となった。
- 次に編者不明『安養抄』を見てみよう。
- (ア)「明」一切凡夫雖念仏。「来」一切凡夫雖有念仏。(韓, p.598)

→「抄」一切凡夫雖有念仏。(『大正藏』 vol.84 p.172b)

(イ)「明」即不願世間富樂。「来」即不願世間富樂。(韓, p.654)

→「抄」即不願世間富樂。(『大正藏』 vol.84 p.140a)。「願」と「願」の異同。ともに部首が同じである。

(ウ)「明」及与二乗菩提菩薩一向志願三身菩提名無上菩提之心。「来」及与二乗菩提涅槃一向志願三身菩提名無上菩提之心。(韓, p.654)

→「抄」及与二乗菩提涅槃一向志願三身菩提名無上菩提之心。(『大正藏』 vol.84 p.140a)

(エ)「明」發心畢竟二不別。「来」發心畢竟二不別。(韓, p.655)

→「抄」發心畢竟二無別。(『大正藏』 vol.84 p.140b)。「不」と「無」の異同である。

(オ)「明」信解諸行皆如幻夢。「来」信解諸法皆如幻夢。(韓, p.655)

→「抄」信解諸法皆如幻夢。(『大正藏』 vol.84 p.140b)。「諸行」と「諸法」との異同であるがどちらも文意は通る。

(カ)「明」約進約退。「来」約法約退。(韓, p.693)

→「抄」約進約退。(『大正藏』 vol.84 p.144c)

(キ)「明」初三人是十信位從本不退直趣入者行者淺深。「来」初三品人是十信位從本不退真趣入者行者淺深。(韓, p.693)

→「抄」初三品人是十信位從本不退直趣入者行者淺深。(『大正藏』 vol.84 p.144c)

(ク)「明」發菩提心修行声聞行。「来」發菩提心修行声聞行。(韓, p.694)

→「抄」發小乘心修行声聞行。(『大正藏』 vol.84 p.144c)

(ケ)「明」但以生便半劫分為三品耳。「来」但以生便半劫一劫分為三品耳。(韓, p.697)

→「抄」但以生便半劫分為三品耳。(『大正

藏』 vol.84 p.144c)

(コ)「明」有成三品。「来」有別以成三品。(韓, p.697)

→「抄」有別以成三品。(『大正藏』 vol.84 p.144c)

(サ)「明」及地前三賢並二乘七方便發心以去。「来」及地前三賢並二乘七方便發心以去。(韓, p.703)

→「抄」及地前三賢菩薩二乘七方便發心以去。(『大正藏』 vol.84 p.144c)

(シ)「明」二乘人中惡法學人。「来」二乘人中愚法人。(韓, p.705)

→「抄」二乘人中愚法學人。(『大正藏』 vol.84 p.145a)。「惡」と「愚」の異同。どちらとも文意は通るのである。

(ス)「明」以懸願自在故。「来」以悲願力自在故。(韓, p.705)

→「抄」以悲願力自在故。(『大正藏』 vol.84 p.145a)

(セ)「明」不問惡与不惡皆得往生。「来」不問愚与不愚皆得往生。(韓, p.705)

→「抄」不問愚与不愚得皆往生。(『大正藏』 vol.84 p.145a)

(ソ)「明」生彼辺地者別是一類非九品攝。「来」生辺地者別是一類非九品攝。(韓, p.641)

→「抄」生彼辺地者別是一類非九品攝。(『大正藏』 vol.84 p.164c)。ここは「彼」という字の出入である。この文は、後述するが、編者不明『浄土嚴飾抄』や永観『往生拾因』、珍海『決定往生集』にも引用される。

以上のことを分析すると、十六文の中で「来迎院本」を支持する文は、(ア)(ウ)(オ)(コ)(シ)(ス)の六文、「明暦本」を支持する文は、(イ)(カ)(ソ)の三文である。「明暦本」「来迎院本」の両者の特色を有しているが、どちらかと言えば「来迎院本」の色彩が強

いと言えよう。ということは、『安養抄』の編者も、源隆国同様、「来迎院本」系のテキストを見ていたと考えられる。

次に編者不明『浄土厳飾抄』を見てみよう。『浄土厳飾抄』は漢文ではなく、全文が書き下し文となっている。

遊心安楽道にいわく、**彼の**辺地に生まるる者、別にして、これ一題にして九品の撰に非らざるなり。(佐藤哲英『叡山浄土教の研究』百華苑、1979. P.505)

とある。これに対して、『遊心安楽道』「明暦本」では「生**彼**辺地者別是一類非九品撰」とあり、「来迎院本」では「生**辺**地者別是一類非九品撰」とある(韓, p.641)。「彼」の字の出入である。「明暦本」か「来迎院本」かの決め手はこの一文しかないが、『浄土厳飾抄』の編者は「来迎院本」ではなく「明暦本」系のテキストを見ていたであろう。

これに対して、永観『往生拾因』、珍海『決定往生集』にも同じ文が引用されている。すなわち、『往生拾因』「生**辺**地者別是一類非九品撰」(『大正蔵』vol.84 p.96c)、『決定往生集』「生**辺**地者別是一類非九品撰」(『大正蔵』vol.84 p.105a)である。これを見ると『浄土厳飾抄』とは逆に「来迎院本」を支持しているのである。

永観『往生拾因』、珍海『決定往生集』ともに伝元暁『遊心安楽道』の同じ文が見られることから、珍海が永観『往生拾因』からの孫引きをしたのではないか、との疑問点も浮かび上がるのではないかとと思われるが、それは適切ではない。なぜならば、珍海はこの文の他にも『遊心安楽道』から引用しているからである。すなわち、「元暁云。以光明真言呪彼土沙。置墳墓上。令亡者解脱。雖無他作自受之理。而有縁起難思之力」(『大正蔵』vol.84 p.114c)である。この文は永観『往生拾因』には見られないのである。したがって、孫

引きとは到底考えられないのである。

さて、次に明恵(高弁)『於一向専修宗選択集中摧邪論』(法然『選択本願念仏集』を破斥する意図をもって撰述されたものとされる)を検討する。

(ア)(明)及与二乗菩提**菩薩**。(来)及与二乗菩提**涅槃**。(韓, p.654)

→(摧)及与二乗菩提**涅槃**。(『浄全』vol.8 p.678b)

(イ)(明)欲**心**悉断之。(来)欲悉断之。(韓, p.654)

→(摧)欲悉断之。(『浄全』vol.8 p.678b)。
「心」の字の出入である。

(ウ)(明)初是如来断德正因。(来)初是如来断**断**德正因。(韓, p.654)。「来迎院本」が「断」の字を重複誤写している。

→(摧)初是如来断德正因。(『浄全』vol.8 p.678b)

(エ)(明)信解諸行皆如幻夢。(来)信解諸**法**皆如幻夢。(韓, p.655)

→(摧)信解諸**法**皆如幻夢。(『浄全』vol.8 p.278b)。

(オ)(明)是明正因。(来)是明正**明**因。(韓, p.650)

→(摧)是明正因。(『浄全』vol.8 p.287b)。
「明」の字の出入である。

(ア)(イ)(エ)の三文は「来迎院本」を支持している。(ウ)(エ)は「明暦本」を支持しているが、それらは明らかな重複誤写という書写ミスだと考えられるから、明恵は『遊心安楽道』の「来迎院本」を手にしていただと考えてよい。

次に凝然『華嚴孔目章発悟記』を見てみよう。

(ア)(華)一味平等周遍法界。(『大日本仏教全書』vol.7 p.396b)

→(明)一味**樂**等周遍法界。(来)一味平等周遍法界。(韓, p.606)

⇒ここでは、「来迎院本」を支持している。

(イ) (華) 酬願乗咸隨機所欲。(『大日本仏教全書』 vol.7 p.396b)

→ (明) (来) とともに酬願乗感随棧所歎。

(韓, p.606)。ただし、「金陵刻本」が「欲」となっている。

用例が少なく、また、「明暦本」か「来迎院本」か、確実な字句の異同がないため、凝然が見た『遊心安楽道』テキストについては確定的なことは言えない。

湛睿『起信論義記教理抄』では次のようになっている。

(ア) 約法約退。(『大日本仏教全書』 vol.94 p.398b)

→ (明) 約進約退。(来) 約法約退。(韓, p.693)

⇒「来迎院本」を支持している。

(イ) 成中三品。(『大日本仏教全書』 vol.94 p.398b)

→ (明) 成中品三。(来) 成中三。(韓, p.693)

⇒厳密にはどちらとも言えないが、強いて言うならば(「品」の写し落とし?)、「来迎院本」を支持していると言えよう。

(ウ) 成下三品。(『大日本仏教全書』 vol.94 p.398b)

→ (明) 成下品三。(来) 成下三品。(韓, p.694)

⇒「来迎院本」を支持している。

以上のことから、湛睿は「来迎院本」系の『遊心安楽道』を見ていたことは間違いない。

定泉『梵網經古迹補忘抄』では次の通りである。

(ア) 二乗菩提涅槃。(『増補改訂版 日本大蔵経』 vol.37 p.324b)

→ (明) 二乗菩提菩提。(来) 二乗菩提涅槃。(韓, p.654)

⇒用例はこの一例しかないが、定泉は、「来迎院本」系の『遊心安楽道』テキストを見ていたことが明らかである。

五、まとめ

以上、検討したことをまとめるとおよそ次のようになろう。

①『安養集』の編者である源隆国は、来迎院本系『遊心安楽道』テキストを見ていた。

②『安養抄』の編者も来迎院本系『遊心安楽道』テキストを見ていた。

③『浄土厳飾抄』の編者は、「明暦本」系の『遊心安楽道』テキストを見ていた。

④珍海、永観、明恵、湛睿、定泉は、「来迎院本」系『遊心安楽道』テキストを見ていた。

⑤①～④のことから、流布していたのは、「明暦本」系の『遊心安楽道』ではなくて、来迎院本系のそれであったことが明白である。しかし、「明暦本」系も少なからず流布していた。

⑤義海は、「金陵刻本」の『遊心安楽道』テキストを参照して『遊心安楽道私記』を著した。

本小論では『遊心安楽道』テキストの流伝という観点から考察したが、今後の課題としては『遊心安楽道』に引用された文を精査することによって、ある程度は、例えば、『無量寿経』の流布本からの引用なのか、あるいは写本大蔵経からの引用なのかが明らかにできるとと思われる。そうすることによって『遊心安楽道』の著者が参照した、テキストの系統が明らかとなり、そのすべてを所持、あるいは閲覧可能だった者が真の『遊心安楽道』の著者であると言えるであろう。最終的には『遊心安楽道』の著者を確定したい。

【参考文献】

青柳綱太郎『原文和訳対照 三国遺事全』名著出版、1975。

愛宕邦康『『遊心安楽道』と日本仏教』法蔵館、2006。

安春根『韓国仏教書誌考』同朋舎、1978。

恵谷隆戒『浄土教の新研究』山喜房仏書林、1976。

- 落合俊典「遊心安楽道の著者」華頂短期大学『研究紀要』第25号、1980.
- 落合俊典「『遊心安楽道』日本撰述説をめぐって」『仏教論叢』第24号、1980.
- 落合俊典『両卷無量寿経宗要』民族社、1988.
- 落合俊典「遊心安楽道諸本攷」華頂短期大学『研究紀要』第33号、pp.20-41, 1988.
- 落合俊典「『遊心安楽道』の諸本について」『仏教論叢』第33号、pp.102-105, 1988.
- 梯信暁『奈良・平安期浄土教展開論』法蔵館、2008.
- 韓泰植「新羅・元暁の弥陀證性偈」『印度学仏教学研究』第43号第1巻、1994.
- 韓普光『新羅浄土思想研究 付・校訂『遊心安楽道』』東方出版、1991.
- 金知見、蔡印幻編『新羅仏教研究』山喜房仏書林、1973.
- 佐藤哲英『叡山浄土教の研究』百華苑、1979.
- 章輝玉「『遊心安楽道』考」『南都仏教』第54号、pp.19-50. 南都仏教研究会、1985.
- 章輝玉「新羅の浄土教」『浄土仏教の思想』第6巻、1992.
- 中村薫『楊仁山の「日本浄土教」批判—小栗栖香頂『真宗教旨』をめぐる日中論争』法蔵館、2016.
- 名畑応順『迦才浄土論の研究』法蔵館、1955.
- 西村岡紹監修・梯信暁著『宇治大納言源隆国編安養集 本文と研究』百華苑、1993.
- 林英樹『三国遺事下』三一書房、1976.
- 福士慈稔『新羅元暁研究』大東出版社、2004.
- 藤田宏達『浄土三部経の研究』岩波書店、2007.
- 文化庁文化財保護部編『来迎院如来蔵聖教文書類目録』1972, p.20.
- 本井信雄「新羅元暁の伝記について」『大谷学報』第41号、1961.
- 八百谷孝保「新羅僧元暁伝攷」『大正大学学報』第38号、1952.
- 李暁箕（佐藤繁樹）「『遊心安楽道』の浄土思想—真偽問題について—」『印度学仏教学研究』第51号第1巻、2002.

